

SINAPIS

社会活動センター・シナピスは平和を実現する使命に向けて生きる人びとを応援します

月刊シナピスニュースレター

Vol.
110

2025. 7

年間テーマ ～戦後 80 年、平和の巡礼者として、祈り、行動しよう～



どんな人にもできることは何かしらある

地上でもっとも小さいといわれている種子、それがシナピス(からし種)です。
イエスは神の愛がすべての人におよび、互いに尊重し合い、
愛し合うように願って平和の種をまき、
やがて鳥が巣をつくるほどの大きな木になると約束しました。

カトリック大阪高松大司教区
社会活動センター・シナピス

TEL/06-6942-1784 FAX/06-6920-2203
Email/sinapis@ostk.catholic.jp
ホームページ/<https://sinapis.osaka.catholic.jp/>

巻頭言

もっと社会に関わる教会となるには

社会福音化部門長

さかい としひろ
酒井 俊弘司教



6月7日に行われた社会福音化部門のつどいで次のようなお話をしました。

① 教会は社会の一部

社会活動の対象は国内外に渡る広いものですが、それぞれの小教区がある地域社会に関わっていかない限り、その地域社会からは認めてもらえません。この視点から振り返ることはとても大切。

② 社会活動をする人たちが福音的になろう

社会活動の活動そのものが福音的であるためには、それにたずさわる私たち同士が福音的な関係をもつこと。私たちの生き方そのものが証しとなるように。

③ 教皇フランシスコの遺産

「信仰はわたしたちの暗闇をすべて打ち払う光ではありません。むしろそれは、夜の闇の中でわたしたちの歩みを導くともしびです。そしてこのともしびは、歩むために十分な光です」と前教皇は言いました。私たちも社会活動を通してすべてのことを解決できなくても、同伴することによって、ともしびとなることができます。

④ 教皇レオ 14 世の目指すもの

神が新たな指導者として送ってくださった教皇の言葉を大切にしていきましょう。

「主の声を聴き、互いに聴き合い、この対話の中で、主が私たちをどこへと呼びかけているのかを見極めることが、非常に重要です」

⑤ 私の話の後、6つの分科会に分かれて〈霊における会話〉が行われ、再び集まってそれぞれのまとめの発表を聞きました。自分たちが関わっている活動について改めて振り返ることができ、また違う活動に関わっている人たちの声も聞くことができ、参加者皆の視野が広がられました。

教皇レオ 14 世が言われた「私たちが識別力、健全な倫理原則、そして神の恵みに対する開放という基準によって導かれること」という社会活動の基本を実践できた集いでした。

集いの終わるちょうどその頃に、それまで小雨模様だった空から太陽が差し込んできて、神様からの祝福のように思いました。

私たちが生きているこの社会において福音的な活動をこれからもがんばろう！…そう皆が思えた集いとなりました。スタッフと参加者の皆様に心から感謝いたします。

2025 年 大阪高松大司教区
社会福音化部門のつどい
もっと社会に関わる教会となるには

6月7日(土) 13時～16時半
会場：教区本部事務局 1 階

報
告



「希望の巡礼者」というテーマのもと、「聖年」を過ごしているわたしたち。
この恵みの年にあたって、「神の国に向かって歩む希望」を抱き、共に新たな一步を踏み出そうと今回の集いを企画し、約70名の参加者は充実した時を過ごしました。

	プログラム	
--	-------	--

- 13 時 はじめの祈り（先唱：デンニ神父）
 ♪キリストの平和♪
 ♪「希望の巡礼者」2025 年「聖年のテーマソング」♪
- 13 時 30 分 社会福音化部門長 ^{さかい としひろ} 酒井 俊弘司教の講話
 「もっと社会に関わる教会となるには」
- 1 4 時 6つの分科会で、「霊における会話」方式での分かち合い。
 参加申し込みに際して、どの分科会での分かち合いに
 参加したいかの希望を出していただきました
- 1 5 時 4 5 分 祈りのつどい
 6つの分科会の発表を聴き、その思いを「♪キリストの平和」にのせて、祈りしました。
 最後に、キーボードとギター伴奏で、「希望の巡礼者」を歌い、
 「聖霊降臨の主日」を翌日に控えて、笑顔で解散しました。

今回は、直接の対話を大切にしたいと考え、オンラインでの参加は企画せず、6つの分科会に分かれて、「霊における会話」方式での分かち合いを試みました。

《6つの分科会》

- | | |
|-----------------------------|--------------------|
| ☆地球の叫びにこたえて（正義と平和） | ☆差別について考える（差別と人権） |
| ☆能登地震 あの時わたしたちは何をしたか？（カリタス） | |
| ☆合理的配慮（障がい者委員会） | ☆船員さんについて知ろう（船員司牧） |
| ☆戦禍・迫害を逃れて（難民移住移動者） | |

社会福音化部門の集い 講話

「もっと社会に関わる教会となるには」

さかい としひろ
酒井 俊弘司教



1. 教会から見る社会と 社会から見る教会

まつむらしばひこ
〈松村繁彦神父(大阪高松教区司祭・札幌教区事務局長)の記事『社会は教会、小教区はその一部』(『福音宣教』6月号より抜粋)〉

司祭に課せられた使命は、単に〇〇教会の司牧に留まらず、教区内外に存在する様々な団体との関わりも重要な役割で、特に学校法人、社会福祉法人、NPO 法人などは、カトリック教会と深く結びついた存在だと考えています。なぜなら、かつてカトリックの司祭たちが設立した施設が今も多く存在し、…信者ではない人々が私たち司祭を必要としていることから明らかです。…現代社会においては、諸宗教対話、エキュメニカル対話、刑務所訪問、人権問題、海外支援など、小教区の枠を越えて教会に関わるべき課題が多く存在し、司祭が積極的に外に出て行く必要のある場所がたくさんあります。信者ではない人々が司祭を待っているという事実は、宣教者にとって大きな喜びです。

つまり、私たちの教会とは〇〇教会だけではなく社会全体を教会として指し示すのです。

私たちが働きかける対象は、圧倒的に教会外部の人々の方が多いのです。

小教区は教区を細分化した地域であり、個々の教会堂がそのまま小教区を意味するわけではありません。小教区の人とはその教会が受け持つエリア内にいる人すべてが対象であり、信者だけを対象にしているわけではありません。

「自分の小教区教会は、社会から見ればどんな教会なのか」という視点を持つ必要を感じました。

2. 教会としての関わり方とは

教会の活動と一般のボランティア団体との違いはどこにあるのか？活動の目的・方法は同じでも、違いがあるとすれば、活動する人(信者)の意向や姿勢ではないだろうか。

☆マザー・テレサ(コルカタの聖テレサ)

「キリストを愛すること…どのような仕事を通してそうするかは重要ではない」

それが神の望みであるという確信…社会活動をする人たちが福音的かどうか大切に。



☆教皇フランシスコ…『教皇フランシスコ 人々に尽くした 88 年の生涯』より
信仰はわたしたちの暗闇をすべて打ち払う光ではありません。むしろそれは、夜の闇の中でわたしたちの歩みを導くともしびです。そしてこのともしびは、歩むために十分な光です。神はすべてを説明する理由を与えてくれません。しかし神は、ともにいて 同伴するというかたちでこたえてくださいます。

☆教皇レオ14 世…選出後の最初の祝福のメッセージで 11 回繰り返された「平和」
最終的な解決策よりも重要なのは、私たちがどのように問題に取り組むかであり、それは私たちが識別力、健全な倫理原則、そして神の恵みに対する開放という基準によって導かれること。

5 月 11 日聖ペトロの墓前で

主の声を聴き、互いに聴き合い、この対話の中で、主がわたしたちをどこへと呼びかけているのかを見極めることが非常に重要。

分科会での「霊における会話」報告

「霊における会話」の方法

第1ステップのために：沈黙の祈りの中で、心に残ったことを書きとめる。

第1ステップ：書きとめたことを発言。他の人は注意深く聞くことに専念する。1人最大3分
その発言について、敬意を表すが、コメントや賛否は行わない。

第2ステップのために：沈黙の祈りのうちに第1ステップの発言を振り返る。

グループの一人ひとりの語りを聞く中で、最も心に響いたこと、抵抗を感じたこと、大きな課題だと感じたこと、聖霊が働いていると感じたことを書きとめる。

第2ステップ：「他者と神にスペースを開く。書き留めたことを発言。

敬意を表しながら相手の話を聞く。1人最大2分。

第3ステップのために：沈黙の祈りのうちに第2ステップの発言を振り返りながら、聖霊がグループとしての私たちをどのように導かれているか、重要なポイントを短い言葉でポストイット（付箋）に一人数枚に書きとめる。

第3ステップ：1人数枚のポストイットを読み上げる形で発言し（1人約1分）、A3用紙に貼っていく。内容において一致している部分を見極め、一致し難い部分や新たな発見も見出しながら、共同作業を通して得られたものを分かち合う。

発表の準備&感謝のための終わりの祈り



《各分科会 ファシリテーターの思い・感想》

1.《地球の叫びにこたえて(正義と平和)》 まえだ しのぶ

「霊における会話」では、従来の分かち合いの「話す・聴く」に加えて、「祈る」が加わり、他の人の言葉を心に落としこんでいく。そこでは人からも積極的に聖霊の働きを請う空気が充ちてくる。人は神から自由意思を与えられたが、それを神の願いに反した的外れな方向へ働かせ、神や被造物との断裂に向かっている。そのような社会の中で、参加者一人一人が、身近な生活を見直し、戦争やあらゆる自然破壊の現状を知る。未来を紡ぐ子ども達へ伝えるべき事は何か。地球の叫びに答える術を考え、語り、共有する。希望がもたらす力を信じて共に歩み、的外れを戻していこうとする。そんな聖霊の息吹がきこえるような分科会だった。



2.《能登地震 あの時わたしたちは何をしたか？(カリタス)》 おおもり ゆうじ 大森 雄二

分科会ではまず、担当の松永神父がカリタスの役割を説明し、教区内で支援を必要とする団体等を皆で共有した。次に、昨年11月に現地ボランティアに参加した田中てるみさん（堺教会）と5月末に参加した大森が現地の状況や体験を報告した。

大地震と豪雨の二重災害は、被災者の復興の歩みや思いを砕いたこと。

それ以上に、行政が全域の断水解消を発表しても、各家庭に水が届かない現実や、スピードが上がらない家屋の公費解体から見えてくるのは、被災者に寄り添わない復興の姿勢。被災者に、目の前の困った人に寄り添うことの難しさと、それでも行動を起こすことの大切さを分かち合った。



3.《「合理的配慮」障がい者委員会》^{にった よしこ} 新田 良子

「合理的配慮」の分かち合いをしました。2024年4月1日から、事業者による障害のある人への合理的配慮の提供が義務化されました。平成25年に制定された障害者差別解消法によって、障害のある人への障害を理由とする「不当な差別的取扱い」を禁止するとともに、障害のある人から申し出があった場合に、負担が重すぎない範囲で障害者の求めに応じ合理的配慮をするものとしています。でも、最も合理的配慮が進んでいないのが教会だと言われています。

「自分の教会には障害者はいない」と思っておられる方がほとんどです。本当にそうでしょうか？困っていても「声をあげられない」、また「声をあげたらクレマーだと思われる」等、現実は大変な状況です。分科会でも、「どうしたら声をあげてもらえるか」と悩んでおられる方もおられました。声が上がる前にいろいろなことを提供して、教会が豊かになったところもありました。負担が重すぎない範囲では、やらなくても良いではありません。よく話し合っ、お互いが納得できる手立てを考えたいものです。



4.《「差別について考える」(差別・人権)》^{みやうち ようこ} 宮内 陽子

参加者の皆さんは初対面の方も多く、また「差別について考える」というテーマは、自身の内面に問いかける必要があるのも、心理的には結構負担の大きいものだったのではないかと思います。それにもかかわらず、お一人おひとりが心を開き、ご家庭や職場での悩みや痛み、世の中への思いを率直に語ってくださいました。心のうちを開示できるのは「霊における会話」ならではこのことで、たくさんの気づきや振り返りを与えられました。今の世の中で善く生きるのは難しいことではありますが、信仰のともしびに支えられて、お互いに励まし合える集いに参加できたことに感謝しています。



5.《「船員さんについて知ろう」(船員司牧)》^{のむら きり} 野村 季里

参加者8名の分科会では、まず最初に担当のエリック神父から船員司牧の歴史をお話していただき、教会がどのように関わってきたかを学びました。神戸や大阪で長く訪船活動をしてこられた Sr.鮫島からは、神戸を離れてもニット帽の作成を広め、ニュースレターを作って発信し、支援の輪を広げて来られたことなどをお聴きし、私たちにできること、考えるヒントをたくさんいただきました。私たちの生活は多くの海外からの輸入品に頼らざるを得ず、それは船員さんの過酷な労働に支えられています。そのことを周りの方々に知っていただけるよう行動につなげていきたいと思います。



6.《「戦禍・迫害を逃れて」(難民・移住移動者)》^{やまだ なおこ} 山田 直保子

ホルヘ神父のお話を聴き、深く感動し、「霊における会話」で各自の思いを発言し、分かち合いました。その結果、難民移住者について、具体的に理解を深めることができたと思います。ホルヘ神父様は、神様は私たちが「無関心」から抜け出す力を与えてくださっているとされました。「まずは知ること」が大切で、知ることによって、より身近な問題となります。そして「難民さん」と知り合った後は、その問題は「隣人」の問題となり、私たちができることが見つかると思うのです。



祈りのつどい
各分科会からの報告を祈りとして

15:45 からの「祈りのつどい」では、各分科会で「気づき」や「思い」をポストイットに書き、貼ったものをまとめとして発表し、それを参加者全員の祈りへと続けました。♪「キリストの平和がわたしたちの心のすみずみにまで行き渡りますように」、「キリストの光がわたしたちの心のすみずみにまでゆきわたりますように」と。そして、翌日の「聖霊降臨の主日」を前に「希望の巡礼者」を歌い、解散しました。



《今回のつどい—参加者の感想》

- ☆知らないことがたくさんありました。学びと刺激をいただきました。ありがとうございます。
- ☆初めての参加です。司教様のお言葉をはじめ、各小教区の取り組み・具体的な話等、大変有意義な集まりで、勉強になりました。
- ☆来た甲斐があったという人が多くて良かった。分かち合いの実りを生かしたい。
- ☆社会活動の話し合いは本物だと、改めて思いました。
- ☆各教会の取り組み・問題点を共有することができました。まずは、持ち帰って社活チームのメンバーと共有し、できることから取り組んでいきたいと思います。今日はありがとうございました。
- ☆今回も気づきをいただきました。短い時間でも一つのテーマについて、他地区の人たちとグループで話すことができありがたいです。これからの社活に活かしていこうと思います。
- ☆知ることと気づきを得る会となりました。会の準備をしていただいた方々、いろいろな話をしていただいた方々に感謝します。
- ☆知らないことが多いと感じました。これからは、活動を通じて少しずつでもいろいろなことを学んでいこうと思います。
- ☆普段、社会活動をしていることに慣れてしまわずに、新しい気づきや小さな喜びを大事にしていきたいと思いました。
- ☆皆さま方の話を聞き、自分がどのように動くか、考えるか、船員司牧という言葉が遠かったが少し近づいたか、人に近づけたか…
- ☆今日は、他教会の方々と分かち合いができて良かったです。報告をお聞きしている時、「あ、『船員について知ろう』チームに入れば良かった」と思いました。というのも、うちの父は船員でオーストラリアやニュージーランドに行っていました。母への手紙に「土日はこの人達は働かないので僕たちが働きます。お金は少し多めにいただきます。不思議です」安息日だからですよ お父ちゃん!!
- ☆とてもよい分かち合いができましたが、グループでのまとめの時間が少し短くなりました。
ファシリテーターの神父さんとグループの皆さんとの出会いに感謝！
- ☆毎年ここに参加して、また頑張ろうという気持ち、希望をいただきます。私はここで得た恵みを小教区の中で伝えることができますように。



お知らせ

11月22日(土)に、四国・高松の桜町教会で
この「つどい」を実施します。お楽しみに！



「ガザ人道財団」GHFが生む「生活の殉教者」(1)

シナピス運営委員 にしぐち のぶゆき 西口 信幸

このパンを食べ、このさかずきを飲み、わたしは主の死をつげ知らせる

コリント人への手紙 I 11:26—28

傷つき、無惨に引き裂かれた子どもたちと共に、聖体の秘蹟の恵みを受けて、その交わりによって救いを得てきた長い2年でした。今、ここで死ぬか、生まれ育った土地を追われるか、の選択を迫られるような、最後の苦しみの時をガザの人たちは過ごしています。

「もう我慢できません。」グレタの声に続きチュニジアから数千人の抗議の行進がラファに向かいエジプトで足止め、ヨルダン川西岸では外出禁止令、そしてジェノサイドの最終段階にある、悲惨な現状を世界の目から、また報道から覆い隠すように、イラン攻撃が始まりました。今月もこの紙面では語り尽くせないほど多くのことが起きる中、イスラエルとアメリカの共謀によるジェノサイドの象徴となっている「ガザ人道財団」の配給に集まる人々の声をお伝えします。

「ガザ人道財団」GHFという名の、人の道を外れた米国組織

飢餓によって引き寄せられて集まった民間人に対する銃弾と砲弾が飛び交う中で3週間、毎日、200人近くの死傷者が出ています。時計仕掛けのように、決められた時刻、あらゆる方向から数分間、クレーンに取り付けられた機関銃が「ロボットのように自動的に発砲」戦車やヘリコプターが群衆に向かって発砲、死の恐怖の中を人々はわずかな食糧を手に入れます。

「1000万食をGHFが提供」と、何事もないように報道されます。その実は、ほとんどの家族が入手できず、市場に回る食品を法外な値段で購入して1日のいのちを繋ぐ家族があり、毎日いのちをかけて、わずかな食糧を手に入れない親があり、運悪く撃たれて一家を支える人を失う家族の物語があり、人々の魂を計画的に蝕んでいることを知っていただきたいのです。

援助ではなく屈辱(ジハード・アル＝アッサル)

▶ジハードは、妊娠中の妻とお腹を空かせた2人の娘への責任の重さに突き動かされ、ガザ最南端にあるGHF配給所への過酷な旅に出た。早朝にテントを出発し、10キロの「過酷な」道のりを90分歩いて、数千人の人々とともにGHFの鉄の門に到着、門が突然開いた。人々は援助物資が積まれた庭に、さらに物資があるホールへと進んだ。

皆一緒に押し合い、何でもつかもうとした。列も整理もなく一ただ飢えと無秩序だけだった。砂糖と食用油が優先、持てるものを何でもつかんで外へ急いだ。そこには人間性の痕跡もなかった。

▶すぐ近くで武装した外国の部隊が介入せずに見守っていた。その一人に近づき、言った、『あなたたちは助けていない—ただ、飢饉を監督している。立ち去るべきだ。必要ない。』

▶手に入れたのはツナの缶詰、砂糖の小袋、パスタ、地面に散らばったビスケットのパック、ビニール袋に入れ、長い道のりを家に戻った。長く留まって撃たれるのが怖かった—でも何かを持ち帰らなければならない。テントに戻ると、娘たちは持ち帰ったわずかな物にも喜んで迎えた。

▶妻と私は持ち帰った食料を分けて、子どもたちが数日間食べられるようにしている。私たちはよく食事を抜く。子どもたちは耐えられない…私は彼らに食べさせる全責任を負っている。



人道支援は死の罠と化した

今朝、ハーン・ユニスで恐ろしく、言葉では言い表せない光景が繰り広げられた。容赦ない飢えに突き動かされ、大勢の人々が小麦粉トラックへと押し寄せた。家族に食べさせる小麦粉を一袋でも手に入れようと駆けつけたが、そこで目にしたのは想像を絶するものだった。トラックの車輪に体が押しつぶされ、小麦粉の袋をめぐる人々は必死に争っていた。食欲さではなく、純粋な必要性からの戦いだった。



多くの人々が地面に倒れ、血を流して動かない中、兵士たちは逃げ惑う人々に発砲し続けた。ガザでの私たちの生活は、慈悲がなく、強い者が弱い者を捕食するジャングルのようになってしまった。ガザはもはや単に包囲された都市ではない。荒廃し、息を切らして生き残るためにもがいている都市だ。

食糧を求めてたどり着いたヤザンの腸を引き裂いた弾丸

ヤザン・ムスレ(13歳)は、何千人もの人々が発砲された、父イハブ、兄ヤジドとともに血まみれで夜明けを過ごした。アルマワシ避難所から夜明け前に出発し、約1時間半歩いてGHFゲート近くにたどり着いた時、「丘の後ろの遠くないところに戦車が見えました。」群衆が門に近づくと四方八方から戦車、ドローンなど、激しい銃声が鳴り響いた。



兄ヤジドは恐怖の瞬間について「弟の腸がこぼれるのを見ました-それは恐ろしいものでした。」ヤザンに当たった弾丸は腸と脾臓を裂き、集中的な治療が必要で、父イハブは食糧を得ることもできず手ぶらで逃げた。しかし、やめられないことも知っている。「援助は屈辱的ですが、私は家族のために危険を冒します。生きて戻るか死ぬかのどちらかだ。飢餓は私たちを殺している。」

なんてことだ！ 耐え難い痛みだ！

ガザ北部バイト・ハヌーンから7人姉妹の中で唯一の男性、モハメド・ザアニンさんは、家族を養うためのわずかな食糧を求めて外出した。小麦粉の袋を取ろうとした時、イスラエル占領軍に殺害された。彼は肩に担がれて家族の元へ戻った。支えを失った7人の姉妹と、母親。祈ることしかできない。この少女が、兄の死体の隣で何を感じているのか、想像してみてください。



これは写真ではありません…

これは言葉では言い表せないほどの痛みの証です。ガザ出身の女性が、引き裂かれた祖国を足元に抱えながら砂の上を歩いている。命のように感じるパンと、世間からは見えない痛みを背負って。家もなく、安全もなく、暖かさもなく...ただ戦争の重荷と日々の糧を待つ子どもたちだけ。これが地球の女神だ…誰が彼女に謝罪するだろうか？



緊急医療を求めるガザの子どもたち

1分1秒を争う海外での緊急医療

数万人の子どもが理由なく奪われてきましたが、今なお数十人の子どもの命が奪われています。命だけは取り留めたものの、医療システムの崩壊によって海外での緊急治療を必要とする子どもの命が危険にさらされています。3件ですが、ここ数日のメッセージを載せました。子どもたち、そしてお母さんの苦しみを思いつつ読んでください。そしてお祈りください。

国土の10%程度の場所に185万人が飢餓状態の中、ガザの民族滅亡が目の前に迫っていますが、子どもたちのいのちが失われてもその魂は引き継がれていくでしょう。子どもがその希望を紡いでいます。私たちも諦めてはいけません。祈りましょう。



マيس・アブデル・アールちゃん...頭蓋骨が開き、ウジ虫に食い殺される

テントの中で遊んでいた時、10歳のマيسにドローンの銃弾が命中した。弾丸は頭蓋骨を貫通し、麻痺、神経損傷、失明を引き起こし、頭蓋骨の一部が摘出された。頭は開いたままで、傷口は膿と感染症でいっぱいだ。日ごとに傷口を開き、縫い直さなければならない。

▶最も恐ろしいのは、数日前に彼女の頭の中に生きたウジ虫が現れたことだ。

医師たちはウジ虫を除去するために頭蓋骨を切り開いたが、適切な薬と器具がなければ、どうすることもできない。マيسは激しい痛み、発作、高熱に苦しんでいる。

ウジ虫がまだ生きている彼女の頭を蝕んでいる。

▶マيسは海外での治療を緊急に必要としている。1分1秒を争う。これは人道的緊急事態であり、あらゆる意味で悲劇である。ウジ虫が彼女の頭を食べているのです。

アムロ君(3歳) ひとりぼっちで死を待っている

妊娠中の母親と弟を失った爆撃の2時間後、瓦礫の下から救出されたアムロ君、重傷を負い、頭部に命に関わる破片の傷を負っている。緊急に海外への搬送と治療が必要です。

リハブちゃん(8歳) イード(断食明け)を恐れて

動きも、喜びも、イードの意味さえも失った少女。単なる犠牲者ではなく、「子どもに対する戦争の目撃者」なのだ。

リハブはガザの公園のブランコで遊んでいたところ、ミサイルが近くに落ち、破片が彼女の脳を貫いた。そして半身不随になった。動けない。遊ぶこともできない。文句を言うこともできない。

ただ見つめるだけ。沈黙の中で。イードが近づいても、リハブは微笑まない。

彼女はそれを恐れている。憎んでいる。イードが来ないことを願う。



聖年

愛の呼びかけ、愛への呼びかけへの私たちの対応

聖ヴィンセンシオ・ア・パウロの愛徳姉妹会
シスター マリア・レー・ティ・ラン

2025年を迎え、私たちは非常に重要な節目を祝っています。今年は、「希望」をテーマとした教会の聖年です。神、他者、そして自分自身との関係を祝い、振り返り、新たにできる機会です。来年の5月まで、大阪高松大司教区の2つの教会の信徒たちとともに活動しています。

なみはや教会や生野教会のコミュニティは、どこの教会へ行っても、人々が巡礼や四旬節の黙想会、十字架の道行きなどを計画し、祈り、そして困っている人々と分かち合っているのを目にしています。

なみはや教会では、毎週土曜日の夜に礼拝を行っています。最近では、毎月ミサの後に若者たちが集まり、神の言葉を分かち合い、聖書について学ぶ会を開いています。特に子どもたちが教会へ来るが増えていることから、将来教会の礼拝でオルガンを弾いてくれるようにと願って、一人のベトナム人の信者が、子どもたちにオルガンの演奏を教え始めました。

生野教会でも、青年たちの人数が最近増えてきています。去年、日本語教室が開かれて、ミサの後にカトリック信者でない人々も大勢が参加しています。

2025年は、南ベトナムの敗北から50周年にあたります。50年間、不和と破壊、喪失と苦痛の重荷を背負って生きてきた後、教会における聖年を祝うことは、ベトナムの人々にとって、自らと子孫のために、より平和で希望に満ちた未来を期待する極めて好ましい機会です。

今年、ベトナムのボートピープル・コミュニティは、日本政府がボートピープルを日本に迎え入れてから45周年を祝う式典を開催しました。彼らを支援してくれた日本の人々への感謝の気持ちを込めて、聖ヴィンセンシオ・ア・パウロの愛徳姉妹会のシスター達は、他のボートピープルと共に、釜ヶ崎の三角公園で、350人のホームレスや日々の生活の中で苦しみや寂しさを抱えている人々に、手作りの食事を配ることを計画していました。去年は、なみはや教会と生野教会の信者さんも支援しました。

この食事を通して、「私たちの心は、いつも皆さんのことを考えていますよ」というメッセージが少しでも伝われば・・・という願いを込めて！

私たちは特に「希望の巡礼者」として、一緒に希望を持って進めるように、物心両面で助け合いながら今年の聖年の間を過ごしたいと願い、活動に繋げていきたいと願っています。

被災者が一歩前へと進むお手伝い

おおもり ゆうじ
大森 雄二

イラン人の難民申請者2名、鈴木順子さん、私の4名で、被災地の七尾と輪島でお手伝いをしました。

「つどい」(6月7日)の分科会のテーマ「能登地震、あの時わたしたちは何をしたか？」は、シナピスとして、何も動きを起こせないまま1年半を過ごした反省を込めて決めました。

このつどいに向けて、少しでも現地の今をお届けできればと思い、まずは体験させていただこうと、今回の企画に至りました。

名古屋教区が起こした「カリタスのとサポートセンター」の七尾ベースを宿舎に、七尾市では2日間同じお宅に通い、処分する大きな家具を2階から降ろしたり、解体予定の納屋と蔵にためられていた処分品の片づけを手伝いました。13種類に及ぶ細かい分別が必要なため、一つ一つの荷物と向き合うほどに、ご家族が、これから前を向いて生きていくため、思い出の詰まった品々の処分を選んだことを意識させられました。2日目は土曜日で、中学生の子どもさんが翌日のピアノの発表会の練習に励んでいました。そのまっすぐな音色は、これまでの思い出への別れと、未来への希望を奏でているように聴こえました。



輪島での作業は、昨年9月の豪雨で氾濫し犠牲者が出た塚田川の流域で難を逃れた家の掃除でした。家屋内の泥はすでにかき出されていて、壁や柱や階段、玄関に残る泥や砂をきれいにする作業でした。この家を再建して住み直すかどうか、ご夫婦の間で意見が分かれていることを聞いてしまい、重い気持ちでの作業でしたが、埃っぽかった家が、最後には潤いに満ちた空間に変わり、再建を望む依頼主さんからは何度も感謝の言葉をいただきました。

ボランティアに向けた朝のミーティングで「輪島市は全域で断水中」と知らされ、100 ㍓のタンクに水を用意して作業に向かいました。大阪に帰って新聞をひっくり返すと「輪島市、全域で断水解消」との昨年末の記事を発見。各家屋の前の水道管まで修復すれば、行政的には断水解消であること。家内の蛇口まで水を通すのは自己責任で、修理業者の不足と被災者たちの資金事情で、問題解消には程遠いことを知りました。スピードの上がらない公費解体の問題とも併せて、被災者に寄り添わない復興の現実を見た思いでした。

同行した難民さん二名は、被災地の現実、人との出会いに、強く心を揺さぶられたようです。海の青さや山の緑の、都会では決して見られない鮮やかな色。被災者が、土地に根ざして続けてきた暮らしを取り戻したい願う気持ち。初めて出会った人たちとまるで家族のような一つのチームとなって、助けを求める人の力になれたこと。

自由を奪われて、力なくさせられている難民さんたちが、強さと優しさを持って被災地へ出かけ、社会貢献する取り組みを、シナピスはこれから続けてまいります。

能登ボランティア感想

すずき じゅんこ
鈴木 順子(垂水教会)

5月28日、シナピスからの参加者3名と共に能登に向かい、私は七尾での2泊3日の貴重な体験をしました。

到着はすでに夕方、翌日は、あるお宅の解体予定の納屋から処分する物を全て運び出し、細かく分別する作業をし、3日目は救援物資を取りに行けない方々のための食品の袋詰めをシスターと共に行いました。

七尾到着までの道すがら、一見すると被害の実態が目に見えては分からないという印象を持ちましたが、七尾でも倒壊した家屋があり被害も大きかったと聞きました。

ある家では、見かけは壊れていないと判断され国からの補助金が下りなかったけれど、いざ床をめくってみると全壊に等しい状態だった例もあったと聞きました。支援が行き届かず商売を続けられずやめてしまった例も沢山あっただろうと想像しました。

活動の前にボランティアセンターで説明を受けた際、七尾の人々は「輪島などもっと被害の大きかった地域を優先して」と自らを後回しにしてじっと我慢していたと聞き、七尾の人々の優しさと忍耐強さを思いました。

大変な生活の中でも人々の楽しみは、支援団体が行う「カフェ」のようで、私が七尾に到着した日にも、近所のお年寄りが「日曜日あるやろう？出かけるのを楽しみにしている」とスタッフの青年にニコニコして話しかけていました。



カリタスのとが行う「じんのびカフェ」やその他の催しはあちこちで開かれています、苦勞の多い被災地の人々にとってその時間は本当に楽しく元気が出るひと時なのでしょう。けれども終わって皆が引き上げてしまうと急に寂しくなる、という声も聞かれるそうです。

「シスターズリレー」という取り組みがあり、カリタスのとをベースにして全国の修道会からシスター達が途切れることなく被災地の人と共に住み、寄り添う活動を続けています。

「忘れないこと」、「寄り添うこと」を実践していて、それがどれほど被災地の人々の慰めと力になっているかと頭が下がる思いがしました。

今回は短い参加でしたが、「ボランティア活動も同じ気持ちでリレーの様に繋いでいけたら良いな・・・」と思いました。

どんな年齢のどんな人にでもできることは何かしらある、と60代の私も感じた3日間でした。

「よそ者」の私たちを温かい笑顔で迎え入れ、わずかなお手伝いにも喜んでくださり、コーヒーやおやつを用意してくださった地元の方、ボランティアを支え、食欲旺盛な私たちに心を込めて毎日沢山の美味しいご飯を用意してくださったシスター方、ありがとうございました。





投稿欄 ガリラヤの風

—故フランシスコ教皇追悼—

『回勅 ラウダート・シ』に学ぶ

阿倍野教会 のむら ひでたか 野村 英隆

2016 年 8 月、教皇フランシスコ著『回勅 ラウダート・シ』(ともに暮らす家を大切に)が刊行されました。私は参加する『旧約聖書』講座で、和田幹男神父から「大変難しいが、深い内容でぜひ読んでください」と勧められ、購入しました。教皇は、自然環境汚染、温暖化や砂漠化など人間の活動が地上に与えている現状を訴え、「先進国の責任とは何か」「ともに暮らす家(地球)を大切に」と厳しく問われていることに感動と共感を覚えました。

2019 年 11 月 25 日、東京ドームで開催された『ローマ教皇ミサ』では、幸運にもアリーナ席に当選しました。

5 万人の 1 人になったことはわが人生の初体験。満場の拍手と歓声の嵐。5 万人が作り出す一瞬の無音無声に身が引き締まりました。説教の中で「日本は経済的には高度に発展している社会。だが、この社会の片隅に置かれている人たちも少なくない。若者たちも不安と競争心の悪循環に置かれている。家庭・学校・共同体が支えあっていこう」と静かに呼びかけられ、感動しました。

翌 2020 年、『人新世の「資本論」』(斎藤幸平著・集英社新書)が刊行されました。この本は、行き過ぎた経済活動が地球を破壊する「人新世」=環境危機の時代に、今の資本主義をどう乗り越えていくか、を多くの実例を挙げて力説しています。

私は、この本とフランシスコ教皇の回勅「ラウダート・シ」には、共通点があると理解しています。二人とも、「ごく少数の富裕層・資本家の金儲け第一主義の新自由主義経済が地球の気候変動をもたらしている。このままでは環境危機と経済格差がますます広がる」と喝破され、「脱成長の新しい経済体制・政治体制への転換」を提言されているからです。

世界中で戦禍が広がり、トランプ追隨の日本では、貧富の格差拡大が止まりません。

いま、改めて世界に問われていることは「回勅ラウダート・シ」の「ともに暮らす家を大切に」の具体化を一歩進めることだと痛感します。このような気持ちを表明し、多くを教わった故フランシスコ教皇様への追悼に代えたいと思います。

事務局こぼれ話

あっこ
ビスカルド篤子

6月0日 赤ちゃんを野宿させるな

知らない人から私のスマートフォンに、「助けて」とメッセージが届きました。スパムや詐欺メールかと目を凝らしていると、続けて赤ちゃんの泣き声のボイスメッセージが届きました。



ただ事ではないと悟り、私の方から電話をかけましたが、声の主はアラビア語しか通じません。私は母子の居場所を検索して、車を走らせました。

待っていたのは若い母親に1歳4か月と生後4か月の赤ちゃんでした。とり急ぎアラビア語通訳が可能な大阪市国際交流協会へ行くことにし、母子を車に乗せました。

赤ちゃんを抱きあげると、おむつに悪臭が漂っていました。

母親は見るからに不衛生な一個の哺乳瓶をこどもたちに交互に吸わせていました。もうおむつもミルクもなかったのです。

国際交流協会に到着した母子を相談員の方がたは温かく迎え入れて下さいました。私は直ちに薬局へ走り、おむつや粉ミルク、母親へのパンや水などを買い、相談室に運び込みました。

協会の皆さんは手際よく寝袋を広げておむつの交換をしてく下さいました。



通訳を介してわかったことは、この家族は難民申請者だがお金も住む場所もなく、支援を求めて朝から晩まで歩き回っているということでした。

事情を知った国際交流協会の人たちもシナピスの皆も、赤ちゃんたちを野宿させてはいけない一心で、保護できる場所を一生懸命に探しました。

このニュースが届く頃には赤ちゃんパパとママが食卓を囲める環境にいますように。

6月△日 外出先でのお昼寝タイム

朝7時の新幹線に乗って岐阜拘置所に向かいました。その日は岐阜地裁で裁判もありましたが、拘置所での接見を終えたあと公判まで数時間が空いてしまいました。朝が早かった私は軽く食べて読書をするうちに眠くなってきました。外出先での昼寝場所といえば、献血ルームです。私はいそいそと献血ルームに入り、時間のかかる成分献血を申し込みました。

職員の皆さんはどなたも笑顔で優しいのです。タオルケットをかけてもらい、リクライニングベッドを心地よい位置まで倒してもらおうと、私はガクツと寝落ちしました。

私のあまりの熟睡ぶりに、看護師さんたちは貧血を心配し、「献血は終わりましたが、そのままお休みください」などと労われ、お言葉に甘えて再びウトウト。目が覚めるとうやうやしくアイスキャンディーが運ばれました。食べ終わってベッドから降りると、お菓子と洗剤をプレゼントされました。そこまでされると、何だか「昼寝ドロボー」しにきたような後ろめたい気持ちになってしまっ、ペコペコしながら私は献血ルームを後にしたのでした。

篤子の「アツ」は、厚かましいの「アツ」と書きますか？ とよく聞かれます。全くね。

活動へのご支援ご協力を
よろしくお願いいたします。



お米、カップ麺、日持ちのする食料品、
家電製品のご寄付をお願いします

お電話をお待ちしています!!

☎06-6941-4999



シナピスホーム（カフェ）

7月の予定

カフェ：12日、19日、26日

★土曜日の13時頃～16時頃

7月 ランチはお休みです

問合わせ ☎080-8940-8847



公式ラインとフェイスブックが
新しくなりました



公式ラインはこちらから

<https://lin.ee/hlNnRd6>



Facebookはこちらから

<https://www.facebook.com/profile.php?id=61577353826677>



HPはこちらから

<https://sinapis.osaka.catholic.jp/>

「ニュースレター配布停止」、
「点訳版の郵送」をご希望の方は
シナピスにご連絡ください。

☎06-6942-1784

あとがき

平和月間が始まりました。7月8月の2か月間を「教区平和月間」とするのは初めての試みです。準備が始まった当初は、「7月に行事をしてくださる地区や小教区はあるのだろうか。教区報の紙面が埋まらないのではないだろうか」と気をもんでいたのです。ところがふたを開けてみると、早々と6月に2つの行事が、7月には23の地区や小教区で行事が開催されることがわかりました。よかった、忙しいなか準備して下さってありがたい、という感謝の気持ちでいっぱいになりました。ありがとうございます。できるだけたくさんの行事に参加し、「平和の巡礼者として、祈り、行動（シナピスニュースの年間テーマ）」していきたいと思えます。（おかだ）
＊行事の案内は教区報7月号、8月号をご覧ください

▽▲▽ シナピスの主な活動 ▽▲▽

◆広報活動

- ・教皇メッセージ、司教団メッセージ等
社会活動の指針の伝達
- ・読者と教会内外の社会活動をつなぐ
機関誌としてシナピスニュースを発行

◆大阪高松教区・社会活動委員会との連携

◆学習会研修会の企画

◆こども基金

世界・日本のこどもたちへの援助

◆日本カトリック司教協議会との連携

正義と平和協議会、難民移住移動者委員会、
カリタス、部落差別人権委員会に委員を派遣

◆人権教育の講師を務めるなど教育機関への 働きかけ

◆難民移住移動者支援

難民移住移動者の暮らしやすい社会を目指して

難民移住移動者 相談ダイヤル

☎ 06-6941-4999

アクセス

〒540-0004 大阪市中央区玉造 2-24-22

カトリック大阪高松大司教区事務局内



●公共交通機関ご利用の場合

JR 森ノ宮駅より 約 1000m

地下鉄中央線森ノ宮 2 番出口より 約 800m

JR 玉造駅より 約 1000m

地下鉄長堀鶴見緑地線玉造 1 番出口より約 800m

●車でお越しの場合

阪神高速 1 3 号東大阪線法門坂出口
法門坂交差点南へ上町を東へ

活動へのご支援ご協力をおねがいします

☐郵便振替 00960-7-61419

加入者名 カトリック大阪高松大司教区
代表役員 前田万葉

☐三井住友銀行 玉造支店 普通 9401958
カトリック大阪高松大司教区 シナピス
代表役員 前田万葉

☐オンラインはこちら →→→

